

令和6年度都市科学部運営諮問会議議事録

日 時 令和7年2月5日(水) 16時00分～17時47分

場 所 建築学棟地下1階図書館

出 席 (主 宰) 藤掛洋子

(外部委員) 宮坂久美子、師岡健一、青木優介

(学内委員) 及川敬貴、河端昌也

欠 席 平野雅之

議事に先立ち、藤掛学部長より挨拶があり、続いて、委員の紹介があった。

議 題

1. 議事録等の確認

資料2に基づき、令和5年度都市科学部運営諮問会議議事録(案)について、原案のとおり確認された。

2. 令和6年度に係る都市科学部の取組について

藤掛学部長より、事前説明より更新された資料や、事前説明において外部委員より挙げられた疑問等について説明があり、及川委員、河端委員より補足説明があった。

その後、都市科学Sの履修者学生による2件の学生発表があり、外部委員よりそれぞれについて質問及び講評があった。

3. 都市科学部への期待・提言

外部委員より以下のとおり、質問及び助言・提言があった。

(師岡委員)

今年度より始動をした都市科学Sについて、非常に良い取り組みであると考えている。都市科学ABCの取り組みは文理融合の視点で多角的に学ぶことのできる都市科学部特有のものであり、学部の魅力でもあると考えている。高校でも教科横断的な学びや探究的な学びを進めているところだが、大学でもフィールドワーク等でより探究的な学びがなされている。そして、都市科学Sという機会がそれを発表する場となっており、今回の学生発表でもそれを実感できた。ぜひ継続してほしい。

(藤掛学部長)

フィールドワークについて、パラグアイ渡航の場合は1年生より準備をし、2年生の間も

準備、渡航、帰国後の報告等かなりの時間を費やして行っている。教員もその補助を行うが、学生たちの学びを追及するほどこちらの負担も増えていくため、どこまでのことができるかが難しい。

(河端委員)

藤掛学部長とは分野が異なり、数学や物理学を用いた実験を行っているが、学生の自発的な学びにより成長していく姿が見られることを大事にしている点は変わらないのではないかと感じた。

(藤掛学部長)

都市科学部の学びの継続のため、今後も各教員と連携をして取り組みを続けていきたい。

(宮坂委員)

先ほどの学生の発表は素晴らしかった。

都市科学部では学生の主体性を引き出すような様々な取り組みを行っていると感じる。地域及び国際的な課題を、自らの学問と結び付けて学んでいくことは大学の方向性としても素晴らしいものであるため継続してほしい。

また、日本社会や大学関係の世界情勢を見てみると、日本の社会全体として人材が不足している。そのため、海外からの人材の受け入れを長期的に描いていかなければならない状況にある。そのような状況のため積極的な留学生の受け入れと教育が必要だが、都市科学部の教育はそれに沿ったものであると考えている。本学の留学生の割合を確認したが、学部の留学生の平均が 2.5%の中、都市科学部は 6.3%と多く、グローバルな取り組みをしているのだと改めて感じた。大学関係の世界情勢からは留学先としての日本の大学の魅力は増しているとの指摘もある。言語の問題などもあり一気に留学生を増やすことは難しいと思うが、今後も都市科学部が牽引役となって多様な人材を受け入れていただきたい。

(藤掛学部長)

海外からの学生の受け入れの一つとして、都市社会共生学科にて受け入れているソクラテスプログラムをはじめとして、その他の留学生の受け入れについても学部としての連携をできるようにしたい。

学生の取り組みや教員の発表を短い動画などにして発信することを検討していたこともあったため、都市科学部の取り組みをより伝えるために再度検討することも考えたい。

(青木委員)

今回は都市科学 S が科目として認定されたことで、より活発な活動が展開されていると感じる。活動は継続していただきたいと考えているが、先ほど話題に挙がった教員の負担増

など、活動の継続には様々な課題が考えられる。金銭面もその一つとして挙がるが、都市科学 S にかかる費用はどのようなになっているか。

(藤掛学部長)

都市科学 S 単体については、予算はほとんどかかっていない。都市科学 S は都市科学シンポジウムの第 2 部という位置付けで開催されており、動画撮影等があったが、それは例年開催されている都市科学シンポジウムの一環として行った。都市科学 S としてかかった費用はポスターの印刷代等軽微なもの。ただし、都市科学 S の発表の内容には、学生が行ったフィールドワークなどがあるため、発表に至るまでの過程を含めるとかなりの費用が掛かっている。

(青木委員)

フィールドワークなどは学生の負担も含めて考えていく必要があるが、先ほどの学生発表も継続をしたことでよりブラッシュアップされていたような印象を受けたため、そのように良い形で継続していただきたい。

また、現在八潮市の道路陥没が話題となっているが、そこにある課題を解決する糸口として、海外や地方で違う価値観を持った人と交流をして得たものが活用できる可能性もあると考えているため、今後も学生が様々な価値観に触れられるような機会を提供していただきたい。

(藤掛学部長)

これから行く地域に対する自分たちが持っていた価値観が、実際に行ってみるとそのようなことはなかったという話を聞くことが多く、その一度壊れ、新しく得た価値観をもとに日本社会が抱える課題について考えていくことができるようになっている。それに加え、学外活動では予測が困難な出来事もあり、それを体験することにより瞬発力や機動力も身に着けられるため、緊急時の対応に必要な力も身につけられている。ただし、危険に直結するものについては、先輩から口頭で引き継がれていたものも含めてマニュアル等に記載をし、事前に予測し行動できるようにより整備をしていく必要がある。

(河端委員)

野外でのフィールドワークでどのようなことに気を付ければよいか等が記載された安全の手引きというものがあるため、言語化できる部分はそこに記載するよう努めているが、実際にその場所に行った先輩から口頭で引き継がれているものについてはそこに載っていないものも多く、総合的なリスクマネジメントができるような媒体にはなりきっていないように感じている。

(藤掛学部長)

都市科学部独自でそのような事項についてまとめたものがあると、年を重ねるごとに蓄積されていき良いのではないかと考えたため、検討したい。

(青木委員)

研究室の実験では先輩が後輩に教える機会があるが、フィールドワークや海外に行く際はそのような機会は設けられているか。

(藤掛学部長)

引継ぎの機会を設けているほか、一度行った学生がもう一度同じ場所へ行くこともあるため、現地で引き継がれていることもある。ただ、記録としても残っていた方が良いと感じた。

4. その他

特になし。

以上